

尾張藩「御山守」の文書行政と村方

太 田 尚 宏

【要 旨】

本稿は、美濃国恵那郡加子母村（岐阜県中津川市加子母）に居住し、享保15年（1730）から明治5年（1872）まで尾張藩の「三浦・三ヶ村御山守」（以下、御山守と記す）を務めた内木家に残された文書・記録類を用いて、尾張藩木曾材木方の出先機関ともいえる御山守が、管轄下の村方との関わりにおいて、いかなる過程を経て文書を作成し、直轄林の管理・活用や地域との利害調整を図っていたかについて、その実相を抽出し、紹介することを目的とした。

御山守は、藩士と百姓の中間的な身分という不安定な立場を克服するため、みずからを百姓ではなく「役人」と位置づける意識が強かった。その意識の表れとして、多岐にわたる山方関係の職務に加え、正確な文書の作成や取次・提出を「役人」としての重要な役儀と位置づけ、村方の作成文書に対して積極的な介入を行った。その事例を明和2年（1765）の盗伐吟味の文書や宝暦13年（1763）の柿板山請負をめぐる村方願書の作成過程から抽出し、内容の正確さを求めて数度にわたる修正を命じたことや内容の点検・加筆にも応じていたことを明らかにした。また、加子母村の組頭年番制という村役人選定の制度が、一般の百姓による文書作成の機会を広げていったことにも言及した。

一方、明和8年（1771）の「御山内御メり方一札」の作成過程では、御山守が示した案文に対して、生活に支障が出るとして文言の削除を求める村方の様子や、御山守が文言の調整を図り、森林の管理と村方の生活を両立させていこうとする実態を析出した。

【目 次】

はじめに

1. 御山守の「御役人」意識と文書事務
2. 山方御用をめぐる村方の願書作成と御山守
 - (1) 近世中後期の尾張藩における森林資源と活用
 - (2) 柿板山請負をめぐる願書の作成過程
3. 「御山内御メり方一札」の文言調整と村々の事情
4. 村の山方文書と御山守一結びに代えて

はじめに

本稿は、美濃国恵那郡加子母村（岐阜県中津川市加子母）に居住し、享保15年（1730）から明治5年（1872）まで尾張藩の「三浦・三ヶ村御山守」（以下、御山守と記す）を務めた内木家に残された文書・記録類¹⁾を用いて、尾張藩木曽材木方の出先機関ともいえる御山守が、管轄下の村方との関わりにおいて、いかなる過程を経て文書を作成し、直轄林の管理・活用や地域との利害調整を図っていたかについて、その実相を抽出し、紹介することを目的とする。

御山守は、木曽御嶽南麓^{おんたけ}に位置する美濃国側の尾張藩領「濃州三ヶ村」（恵那郡加子母村・付知村^ち・川上村^{かわうえ}）のことで「裏木曽三ヶ村」ともいう）と信濃国（本木曽^{もと}）に位置しながらも経路の関係で信州側からは入山するのが困難な三浦山にある直轄林の管理を担当する山役人で、同藩の木曽材木方の支配下に属した。木曽材木方は、木曽材木奉行（通常2名）のもと、名古屋城下^{はばした}の中下に役所が置かれ、木曽上松^{あげまつ}に出張陣屋が設置されて、直轄林の管理や御用材の伐採・運材などを司っていた。

木曽材木方からの日常的な令達や指示は、主として御用状を用いて行われ、名古屋や上松から発せられた文書は、中山道の継立を利用して落合宿まで運ばれ、ここからは村継人足によって加子母村まで届けられた。一方、御山守から提出する届書や願書類も同様に、上記のルートを用いて伝えられたが、こうした文書の伝達経路は、享保15年の役職成立にともなって、御山守側からの出願によって整備されたものであった。

御山守の職務は多岐にわたるが、主なものとして、①三浦山の「御境伐明ヶ^{おさかいきりあ}」と御山見廻り、②濃州三ヶ村の御山見廻り、③盗伐の摘発と吟味、④「御山見廻帳面」類などの書類の作成と木曽材木方への送付、⑤森林資源の利用に関する願書の取次と送付があり、のちに、⑥三ヶ村の家作見分、⑦御改^{おあらため}木口印入^{こぐちいんいれ}への立会い、⑧種子・苗木の調達と植林の指導が加わった²⁾。これらの職務は、いずれも木曽材木方役所と文書による綿密な連絡をもとに行われたが、このうち特に③・④・⑤が文書事務を考える上では重要なものであった。

本稿では、これらの文書に注目し、山方の管理や活用に関する文書が、どのような過程を経て作成・修正されて送達されたかという、当時の文書作成事務の実態を跡づけてみたい。その上で、資料の文面のみでは知り得ない御山守と村びとたちの動き＝コンテキスト部分を浮き彫りにし、1通の願書や証文に込められた意味を考えてみたい。

1. 御山守の「御役人」意識と文書事務

御山守の職務に関わる文書事務の骨格を形づくったのは、宝暦6年（1756）より安永4年（1775）まで2代目の御山守を務めた内木彦七^{たけひさ}武久（以下、彦七と記す）であった。彦七は、当初は隣国の飛騨幕領との境界確定という臨時的性格が強かった御山守の役儀を職制の中に定置させるため、文書の作成や取次・提出を職務の一環として位置づけ、その活用を図った。御山守は、尾張藩から扶持5人分が支給され、苗木帯刀の身分ではあったものの、士分である手代

1) 内木家文書の概要については、別稿「尾張藩『御山守』の職務形成と記録類」（『国文学研究資料館紀要アーカイブズ研究篇』第14号、2018年）において詳述したので、ご参照いただきたい。

2) 前掲註1 拙稿、および芳賀和樹『御山守の仕事と森林コントロール』（徳川林政史研究所、2020年）。

格が与えられず、藩士と百姓の中間的な地位に位置づけられていた。こうした不安定な立場の御山守という役職を恒常的な地位として確立するため、自らが「役人」であることに強いこだわりをみせた。

〔史料1〕

此夜政右衛門御呼出し、村方メリ方不宜、殊更去年彦七へ一札不差出儀心得違之事候、彦七ハ軽キ役人たりといへ共、役儀を以取扱候儀御上へ差上候儀＝候処、彦七へ出候儀ハ同人へ出スと相心得候儀ハ、甚不埒之至＝候³⁾

上記の史料は、明和4年（1768）に彦七が記した「御山方御用^并諸事日記」の3月19日の記事で、木曽材木方の役人が巡村する際、加子母村の庄屋である政右衛門の屋敷を宿所に定めようとしたところ、理由の説明もないまま庄屋が柚頭の利左衛門宅を宿所にしようとしたことに對し、武久が政右衛門を呼び出して詰問したときの一部である。

ここで彦七は、最近村方が不取締であると前置きをした上で、前年に庄屋が彦七へ宿所決定に関する「一札」を差し出さなかったことを「心得違」であると述べ、彦七は「軽キ役人」ではあるが、役儀に関わる事柄を「御上」（尾張藩）へ伝達する立場であり、文書は藩へ上申するためのもので、彦七個人へ宛てる性格のものではないと述べて、庄屋の行動をはなはだ不埒であると咎めている。ここから、彦七は支配管轄である濃州三ヶ村の村役人や百姓から提出された文書を確実に取り次いで藩へ上申することを、「役人」である自らの役儀として強く認識していたことがわかる。

そのため彦七は、藩への上申文書の形式・内容の正確さや提出手続きなどには、すこぶる厳格に対応した。

明和2年3月、加子母村のおこ小郷という集落でそむきざり背伐（盗伐）の痕跡が発見された。ただちに彦七は、小郷の組頭へ吟味を命じ、疑いのかかった4人に対する取調べを行わせ、口上書を提出させた。口上書の下書は、3月25日に組頭2名によって彦七のもとへ届けられたが、彦七は「一見申候処、不分明成書付共＝候⁴⁾」といった状態であったため、内容が明確でないとして、再調査の上、改めて提出するように命じた。

2日後の3月27日、小郷の組頭は彦七が滞在していた付知村まで赴いて口上書を再提出した。しかし彦七は、それでも納得がいかなかったようで、「いまた認方とくと無之故、認直し差出候様申渡ス⁵⁾」とある。書き改められた3度目の口上書はその日の夕刻に届けられ、彦七は内容を吟味した結果、組頭らへ印形を押させて受理することになった。

ちなみに、このとき彦七が受け取った文書は、「庄屋分判物式通、扣壺通、四人之者共口書四通、扣四通⁶⁾」で、庄屋作成の押印文書2通に控が1通、組頭が作成して修正を重ねた口上書4通とその控が4通となっており、口上書は本書・控のそれぞれに捺印させている。このうち庄屋作成の押印文書1通と捺印した口上書4通が木曽材木方へ送達され、庄屋の押印文書1通とおそ

3) 明和4年「御山方御用^并諸事日記」（内木哲朗家所蔵）3月19日条。以下、「御山方御用^并諸事日記」については、明和4年「日記」などのように略記し、それぞれの初出の際に所蔵先を記しておくことにする。

4) 明和2年「日記」（徳川林政史研究所所蔵、林 1138）3月25日条。

5) 明和2年「日記」3月27日条。

6) 同上。

らく押印がない文書1通、それに押印した口上書4通が彦七の手元に残されたものと思われる。

御山守のもとでは、職務内容にともなう村方が作成・押印する文書の数が決まっていたようで、一般的な願書などは、木曽材木方へ送る押印文書（判物）および彦七の控として残す押印のない文書（無判物）1通を差し出させるのが通例であった。しかし、背伐のような御山守の進退にも直接関わるような重要案件の場合は、正式文書を木曽材木方へ送るだけでなく、御山守の手元にも押印した文書を残し、正式文書に準ずるものとして保存していたことがわかる⁷⁾。

このように御山守は、上級役所である木曽材木方へ正確な情報を伝えるため、村方から提出された文書を吟味し、場合によっては数度にわたって書き直しを行わせて、文書内容の精度を高めていったのである。

また、彦七は内容のみにとどまらず、文書の様式や文言などにも細かな指示を加えていた。例えば、宝暦13年（1763）2月には、村方の百姓が差し出した願書の差出人の名前の位置について「名印高ク候故、認直シ来候様^ニ」⁸⁾と申し渡しており、また、明和2年7月に付知村で落雷によって打ち砕かれた立杉（藩が植林した杉）が発見された事案では、発見者が作成した注進書の宛名について「様付ケ^ニいたし差越候付、殿付ケ^ニ認直させ」⁹⁾と、敬称を書き直させている事例がみられる。

筆記の仕方や料紙についての言及もある。明和2年11月、毎年定例で村方から提出させている御仕人足帳おつかいあんぞくをチェックしていた彦七は、加子母村から出された帳面に「殊更墨付キ居」¹⁰⁾＝太く墨が着いていて判読できない箇所があることを発見し、書き直しを指示している。また、同年7月には、木曽材木方から金子を下付されたときに付知村の佐左衛門が持参した請取書があまりに粗末な紙で書かれていたため（「余り龜紙にて認来候」¹¹⁾、役所に対して礼を失していると判断して再提出させている。

以上のように、御山守は、軽輩とはいえども「御役人」であるという意識を強く持ち、村方からの文書を正確に木曽材木方へ伝達するのが役儀の一つであると認識して、内容はもとより様式・文言・筆記・料紙などに至るまで細心の注意を払いながら、村方の者たちへ文書を作成させていたのである。

2. 山方御用をめぐる村方の願書作成と御山守

（1）近世中後期の尾張藩における森林資源と活用

御山守のもとには、藩の山方管理・活用に関するさまざまな願書や請書・届書などがもたらされた。ここでは、以後の行論に必要な限りにおいて、尾張藩の森林管理・活用の概略について述べておきたい¹²⁾。

7) 彦七は、これらの文書をさらに留帳に転写している。明和2年「御用諸事留書」（徳川林政史研究所蔵、林414-第1冊）には、庄屋作成の文書および口上書4通が転写されている。

8) 宝暦13年「日記」（内木哲朗家蔵）2月16日条。

9) 明和2年「日記」7月11日条。

10) 明和2年「日記」11月9日条。

11) 明和2年「日記」7月14日条。

12) 詳細については、拙稿『『木曽五木』と濃州三ヶ村』（徳川林政史研究所編『江戸時代の森林と地域社会』、同研究所、2018年）、拙稿「宝暦期における尾張藩の御材木仕出と『三浦・三ヶ村御山守』

尾張藩では、享保の林政改革以降、御留山・御巢山・鞆山・明山（以上、直轄林）と百姓控林（田畑後背の名請地で小規模な植林地）という面的な伐採・用益区分が施され、これに加えて禁伐樹種である御停止木（ごちようじぼく 桧・ひのき 榎・さわら 明榎・あすひ 高野榎・こうやまき 鼠子のいわゆる「木曾五木」）制度が設けられていた。御停止木は、上記のいかなる区分の土地の中でも禁伐とされ、百姓らが伐採できる明山・百姓控林の中にあっても育成が義務づけられ、原則として百姓の判断で独自に活用することはできなかった。

近世前期の乱伐によって「つきやま 尽山」と呼ばれる有用資源の枯渇を経験した尾張藩では、上記の御停止木のうち、良木が数多く繁茂する地帯を御留山として温存し、それ以外の場所については本木曾・裏木曾の各地を66年間で巡回して伐採する「六十六年一周之仕法」を立てて御用材生産を実施したといわれる。しかも伐採にあたっては、成長不良の樹木（ふるき 古木・たちかれ 立枯・どやき 朋木・根上り）や、伐採後の跡木（かぶき 株木・すえき 末木）、獣害による皮剥木（くまはぎ 熊剥・猿ばみ）、強風・降雪・土砂崩れ・出水などによって折れたり、倒れたり、根ごと流される樹木（かぜおれ 風折・ねがえ 根返り・おしだ 押出し）といった、いわゆる枯損木を優先して利用した。「あくぎ 悪木」「きずぎ 疵木」などと総称されるこれらの枯損木は、そのまま放置すれば良木の成長の妨げになると同時に、朽損が進んで角材・丸太・板樽などの中小用材を造材する可能性も絶たれる。尾張藩では、限りある森林資源を有効に活用するため、枯損木を的確に選定して伐採し、造材可能な部分を用材として活用するという方法がとられたのである。そして、御山守や山手代といった下級の山役人は、「きだねけんぶん 木種見分」と称して枯損木の選定作業を実地に行う「目利き」の専門家でもあった。

一方、御用材を伐り出した後の株木（伐採部分より下の残木）や末木（根元近くの木）も有用な資源であった。板葺き屋根の柿板（こけらいた 葺板）や天井用の差板（さしいた 羽目板）に加工したり、根を掘り出して燃料として利用できるからである。角材・丸太・板樽などの御用材は、柚頭や富裕な百姓の出願・入札によって行われたが、株木・末木を使った小規模な柿板・差板生産は、村請や小前百姓の出願による請負が中心であった。こうした枯損木の伐出しや株木・末木の活用は、木曾材木方によって「御掃除山同前（然）」と表現され、次世代の樹木が更新可能な林床を整理していくことに役立った。

（2）柿板山請負をめぐる願書の作成過程

宝暦13年（1763）2月、濃州武儀郡上之保村（尾張藩領）の定吉が、加子母村の西股入・にしまたいり 度合どという地域の山内において、尾張藩が御用材を伐採した後の株木や末木を使って柿板こけらいたの生産を請け負いたいと木曾材木方へ出願してきた。材木方では、管轄する御山守の彦七に対し、定吉が請け負うことにより加子母村の者たちに支障が生じないかを確認するように指示した。彦七は、村の庄屋・組頭へ内談におよび、西股入・度合それぞれに近接する村組の組頭より意見を聴取することにした¹³⁾。

庄屋の政右衛門は、御用材生産には主として桧・榎などの御停止木が用いられており、百姓らが桶木や葺板などの生活用材を採取するのは榎・とど 松なので、特に支障は生じないとの意見であった。組頭たちも当初は庄屋の意見に同調する気配を見せたが、これに異論を持つ者が出て

（『徳川林政史研究所研究紀要』第52号、2018年）および註2の芳賀和樹『御山守の仕事と森林コントロール』を参照。

13) 宝暦13年「日記」2月14日条。

きて、意見はまとまらなかった。

一部の組頭は、同じ尾張藩領とはいえ、地元以外の者が入山して柿板の請負生産をするのは、みすみす地元の利益を逃すことになり、好ましくないと考えたようで、組頭たちが打ち寄って協議した際、加子母村からも対抗して同様の出願を行い、地元請負にしたらどうかという話が持ち上がった。

〔史料2〕

此朝組頭定右衛門・百姓宇右衛門来ル、一札相認持参、差出、則一見申候処、文言訳ケ少も相知レ不申付、分明ニ願之筋相知レ候様、相認来り候様ニと申含遣候処、即刻又仁右衛門来り、只今之兩人拙者方へ参り、委細之儀被仰聞被下候得共、一々覚へ不申候間、今一応相伺呉候様ニと右兩人申候由申聞候付、仁右衛門へ具ニ申含遣ス也¹⁴⁾

これは、彦七が記した日記の同年2月16日の記事である。これによると、組頭たちの意見を代表して、組頭の定右衛門と百姓宇右衛門が、西股入・度合の柿板生産を地元請負にしたい旨の願書を彦七へ差し出した。彦七はそれを一読したが、意味不明の文言が並び、内容がよくわからない状態だったので、出願の内容がよくわかるような文章に改めて出し直すように命じたとある。

しかし、定右衛門と宇右衛門は、このとき彦七が指摘した内容をよく理解できなかったらしく、すぐさま彦七の近隣に住む仁右衛門（彦七の知人）のもとを訪れ、彦七が述べたことを覚えきれなかったので、いま一度尋ねてもらえないかと泣きついたらしい。やむなく仁右衛門は、彦七宅を訪れて再び詳しく内容を聞いたという。

仁右衛門と定右衛門らは、彦七から指摘されたことを反映させて願書を整えることができる人物を探し、二渡り^{ふたわた}という集落の百姓伊兵衛に下書を依頼した。その日の昼前、伊兵衛は彦七宅を訪れて、下書の作成を任された旨を伝え、下書を差し出して適宜加筆してほしいと願い出した。彦七は加筆した下書を伊兵衛へ戻し、それをもとに清書した伊兵衛らは、改めて文書を彦七へと提出した。彦七はこれを受理し、その日のうちに手元にあった上之保村の定吉の願書と加子母村の伊兵衛らが記した願書の2通を合わせて板挟みにし、木曽材木方へと送達している。

以上のやりとりからは、当時の加子母村における村びとたちの願書作成の過程がよくわかる。組頭たちの合議の結果を代表の組頭が成文化したものの、そのままでは文意をとりにくく、彦七が口頭で問題点を指摘しても十分に理解できなかった、そこで識者に頼んで再び聞き取りをしてもらって意図を把握し、村内にいる文書に精通した者に依頼して形を整え、さらには彦七の加筆を経た上で、ようやく正式な願書が完成したのである。

なお、こうしたプロセスを経なければならなかったのは、加子母村における村役人の選定方法にも原因があったものと思われる。白川の谷間に細長く集落が展開する加子母村では、小郷^{おご}・小和知^{おわち}・二渡り^{ふたわた}・番田^{ばんだ}・中切^{なかぎり}・上桑原^{かみくわばら}・中桑原^{なかくわばら}・下桑原^{しもくわばら}・万賀^{まんが}・角領^{かくりょう}という集落ごとに、組頭1～2名が年番で選任されていた。彦七の日記を見ると、毎年正月に開かれた組ごとの初寄合のときに当該年の組頭が決まっており、彦七のもとへ挨拶に訪れている。組頭は小前百姓が文書作成能力の有無にかかわらず順番に勤めなければならない村役になっていたわけである。

加子母村の村政は、基本的には上記の村組を単位として行われており、宗門人別帳などの文

14) 宝暦13年「日記」2月16日条。

書は組単位で下書が作成され、庄屋へ提出してとりまとめる形をとっていたと推測される¹⁵⁾。また、家作かさくの際に御山守へ提出する家作願書や家作連印いっさつ一札も、作成・提出の実務は組頭が行っていたことが確認できる¹⁶⁾。村内の組頭は、文書の作成事務を必然的に担わなくてはならなかったのである。しかも、組頭年番制をとった加子母村では、小前百姓が毎年順番に入れ替わって文書作成に関わらざるを得ない環境に置かれていたことになる。当初は、前記の事例のように、文書の文言や様式などを十分に理解できず、村内の有識者に頼って文書事務を遂行していた組頭たちであるが、文書に関わる機会が増えるにつれて理解が深まっていき、年番交替制によりこうした経験を有する者が広がっていくことを通じて、文書に対するリテラシーが身に付いていったのではないかと考えられる。

なお、この柿板請負をめぐる一件では、上之保村の定吉が柿板生産を請け負うことに関して、加子母村の庄屋と組頭たちとの間で差し障りの有無について意見が分かれていた。組頭たちの願書を受け取った木曾材木方では、この点について庄屋を召喚して改めて意見を聴取し、いったん組頭たちの願書を差し戻した上で、両者が熟談して庄屋・組頭「連判」の形式で願書を差し出すように申し渡している¹⁷⁾。村内一統の合意を証明する文書として連判形式が使われていたことを示す事例といえよう。

3. 「御山内御メリ方一札」の文言調整と村々の事情

前述したように、尾張藩による面的な伐採・用益区分と、それにとらわれない禁伐樹種の広範な設定という厳しい規制の中で、村方の者たちは、農具や桶材・屋根葺き材などの生活用材を確保する必要があった。当初百姓たちは御停止木の繁茂箇所を避けて明山内の松や栗・雑木を用いて充当していたが、それらも次第に減少し、日常的に用いる用材に事欠く状況となっていた。そこで明和8年（1771）、加子母村の村役人らは、山内で御用材の伐採を行った後に残った株木・末木や古木・根木といった枯損木を伐採させてほしいと藩へ嘆願することにした。

同年2月18日、組頭の彦右衛門・吉右衛門・伊兵衛・九郎右衛門が彦七宅を訪れ、願書の下書を提示した。しかし御山守は、大切な山内へ入り込んで樹木を伐採するからには、事前に村内で合議して山内の取締り（「御山内御メリ方」）について仕法を立て、それを願書に書き込むべきであるとし、さらに立ち入る範囲についても具体的な見込みを示すようにと説諭して、いったん下書は差し戻しになった¹⁸⁾。

翌々日の2月20日、組頭の吉右衛門・清蔵が彦七宅を訪れ、彦七が指摘した立入範囲については西股入の「沢中ふき小屋迄」とすること、「御山内御メリ方」に関しては、①入山するのは3月・10月の年間2回に限定すること、②期間中は組頭が山中を見廻って粗略なことがないように監視することを決定したと報告し、改めて庄屋・組頭・頭百姓の連判による願書の下書

15) 加子母総合事務所には、加子母村の嘉永3年「人別御改帳」（近世29）が保存されている。内容は中切という集落に関するもののみであり、この人別帳が中切の組頭によって作成されたものであることが示唆される。また、愛知県岩瀬文書所蔵の「加子母村記録」（96-70）にも弘化2年の「人別御改帳」が収録されているが、これも内容は中切地区のみとなっている。

16) 家作願書・家作連判一札に関しては、前掲註1拙稿の21～23頁を参照。

17) 宝暦13年「日記」3月4日条。

18) 明和8年「日記」（内木哲朗家所蔵）2月18日条。

を示した。しかし、彦七はこれだけでは不十分と思ったのか、従来通り無高者が山内へ入り込むことは禁止すること、伐採した木品は他領へ持ち出して売買しないこと、の2点を追加して願書へ盛り込むように要求した¹⁹⁾。村方はすぐに受諾して、その旨を願書に記載し、彦七は受理した上、同月28日に「右御勘考之上、村方願之通被仰付候方ニも可有之候半哉、右之通被仰付候儀ニも御座候ハ、御山内火之元并メり方之儀急度申渡、連判一札等為差出候様可仕候」（本件を考慮した結果、村方の願い通りに許可してもよいのではないかと。もしその通りでよいというお考えならば、山内の火の元および取締り向きを嚴重に申し渡し、連判一札を提出させたい）という意見を付した御用状とともに、木曾材木奉行へ宛てて送達した²⁰⁾。これをうけて、木曾材木方では願書の審議を開始し、2月晦日に名古屋から帰った杣頭の利左衛門からの報告では「跡山願も首尾能候由」²¹⁾とのことであった。

これを聞いた彦七は、奉行宛の御用状に記した通り、村方から連判一札をとるべく準備にかかった。そして3月8日、川上・付知・加子母の3か村へ向けて御用状と連判一札の案文（雛形）を送り、「右案文之通一札相認、近日我等方へ可被差出候」と命じた。

〔史料3〕

差上申一札之事

① 一、信州三浦山并西股入出ノ小路之儀、御留山之儀ニ御座候得ハ、御用無之者一切入込申間敷候

② 一、御停止木之儀、枝葉等ニ至迄、堅ク差障り申間敷候

③ 一、御巢山ハ不及申、桧類御座候御山へ一切入込申間敷候

④ 一、白木類ハ勿論、炭灰・竿皮・藤類其外何ニよらず、御山内へ取出シ他領・他村江一切売出シ申間敷候

⑤ 一、りやうふ摘其外何ニよらず御境を越、他領山江毛頭も入込申間敷候

⑥ 一、前々も蠅取糺ニ事寄セ御山内より密ニ鳥糺仕出シ、他領・他村江も売出シ候段相聞江、追々御吟味御座候儀ニ候へハ、少々之蠅取糺ニ而も御山内へ堅ク取出シ間敷候

右前条之趣、今般被仰渡承知仕候、村内小百姓・無高者迄も不洩様急度申渡、相互ニ吟味仕、堅ク相守可申候、若相背候者御座候段及御見及御聞被成候ハ、早速可被仰達候、為其連判一札差上申処如件

明和八年

卯三月

何村組々頭百姓

誰々

同村組頭不残

誰々

同村庄屋

誰

内木彦七殿

内木善右衛門殿²²⁾

19) 明和8年「日記」2月20日条。

20) 明和8年「卯年中御用状留」（徳川林政史研究所収集史料 林388第11冊、徳川林政史研究所蔵）。

21) 明和8年「日記」2月晦日条。

22) 前掲、明和8年「卯年中御用状留」。

この史料は、彦七が送った案文の写である。内容は、①御留山である信州三浦山と加子母村西股入の出ノ小路山には立ち入らないこと、②御停止木については、枝葉に至るまで差し障りが生じないように取り計らうこと、③御巢山はもとより桧類が生い立っている山には一切立ち入らないこと、④白木（木地物）をはじめ、炭灰・竿皮・藤類など何であっても御山内から持ち出して他領・他村には売買しないこと、⑤りょうぶ摘みなど、いかなる理由であっても他領の山へ入り込まないこと、⑥以前にも蠅取りのためと称して密かに鳥糞をつくり、売買して吟味を受けたという事例があるが、少しの蠅取糞であっても御山内から取り出さないこと、という6か条について承知し、村内の小百姓・無高を問わず申し渡して相互に吟味を行い、背いた者がいた場合には速やかに進達におよぶ、というものである。いわゆる山法度証文という性格の資料で、入山禁止の場所や林産物の他領への売買禁止などの一般的な原則を定め、役所が支配の村々へ案文を送って、それを書き写して連印・提出させるという種類の文書であり、彦七も自ら「右案文之通一札相認」と記している。

ところが、この連判一札の案文をめぐる、3か村の生活事情がそれぞれ異なり、彦七は問い合わせに対応せざるを得なくなる。問題になったのは、御巢山や御停止木が生い茂っている場所への立入りを禁じた第3条である。

まず加子母村であるが、こちらはそれほど問題がなかったようで、押印漏れの人物がいて提出が遅れたものの、案文の通りに記載した連判一札が提出されている²³⁾。

しかし、付知村・川上村の場合は、案文通りに記述すると、日常生活に支障が生じる危険性をはらんでいた。

〔史料4〕

昼比付知与頭甚兵衛きたる、先日被仰渡候御山メり方御案文之内、御停止立へ堅ク入込申間敷段被仰渡候処、向付知之義ハ所々御停止立をも通り来、草取候儀ニ候へハ、右一件をは御抜き被下候様相願候旨申間候付、御停止立之内、道筋通り候迄ハ不苦様相見候、兎角御停止立ニて不埒出来不申様為致度申遣候儀ニ候間、其段相心得候様甚兵衛へ申渡ス²⁴⁾

これは、彦七の日記の3月14日の記述の一部である。この日の昼頃、付知村組頭の甚兵衛が彦七宅を訪れ、案文の第3条について、付知村のうち向付知と呼ばれる集落では、草取りに出かけるためには御停止木が生い茂った場所を通らなければならないので、この部分の記述は除いてほしいと求めてきた。これに対して彦七は、単に村びとが道筋を通行するだけならば差し支えなく、要は御停止木のある場所で不埒なことが起こらないようにしたいという趣旨なので、その旨を心得るようにと説諭した。ここでは、文言の内に込められた意図を補足説明する形でおさめ、文言自体を修正するまでには至らなかった。

しかし川上村の場合は、案文通りにはいかなかった。

〔史料5〕

暫跡より川上仙右衛門来ル、先日申遣候御山メり方一札案文之内、御停止立へ入込不申様被仰付候得共、川上村之義ハ草山際分都御停止立之内ニ而切出シ申儀ニ御座候へハ、此段御勘弁被下候様、庄屋・組頭相願候旨申間候付、三ヶ村諸事一統之事ニ候故、分ケ而不申遣

23) 明和8年「日記」3月13日条・3月16日条。

24) 明和8年「日記」3月14日条。

候、尤之事ニ候間、御巢山へ御用無之者一切入込申間敷段書入、差出シ可然旨、申渡遣ス也、夫々仙右衛門帰ル²⁵⁾

これによれば、川上村では、薪炭や肥料の採取に用いる草山の周囲がすべて御巢山に認定され、御停止木の繁茂箇所になっているため、「御停止立」の場所を通らずに草山へ入るのは不可能なので、第3条を書き載せることは勘弁してほしい旨を申し出たとある。彦七は、3か村一統に対する指示なので、個別の村の事情を斟酌せず^{しんしやく}に案文を送ったが、申し出はもっともなことなので、御巢山へ無用の者は一切入り込んではならない旨を書き入れて提出するようにと申し渡している。

彦七が作成した明和8年「卯年中御用状留」には、このとき3か村それぞれから提出された連判一札が書き写されている。このうち加子母村・付知村に関しては、案文通りの記載になっているのに対し、川上村が差し出した連判一札では、第3条が「一、御巢山江御用無之者、一切入込申間敷候²⁶⁾」という文言に変えられており、上の経緯を裏打ちするものとなっている。

このように、事前に支配役所から案文が示されて、村方がこれを書き写し、署名・連印する形式の文書でも、実際には村方の事情によって支障の有無について申し出があり、御山守はそれぞれ文言の調整が必要か否かを判断し、場合によっては記載内容の変更を行っていたことがわかる。事前に案文が示される文書については、型通りの内容であるとして、村々による微細な記述の違いを見落としがちであるが、こうした記述が村方の生活慣行のありようを反映している場合もあり、注意が必要となってくる。

4. 村の山方文書と御山守—結びに代えて

以上、内木彦七の日記などを手がかりに、近世中期の加子母村で行われてきた山方関係の文書作成のプロセスについて紹介してきた。

彦七は「三浦・三ヶ村御山守」の職務の一環として、正確な文書の作成・送達を強く意識し、このことを通じて、みずからが村役人とは異なる尾張藩の「役人」であるという村内での地位を担保しようと図った。そして、このことを背景に村方が作成する願書や請書・届書の作成過程に積極的に介入していった。

一方、加子母村の百姓たちは、組頭年番制のもとで、能力の有無にかかわらず順番に文書作成事務に携わり、ときには周囲の識者たちの助力を得ながら、組頭の職務としてさまざまな文書を起草した。これに対して御山守は、正確さや具体性を求めて何度も修正を命じ、時には内容だけでなく、様式や料紙にまで踏み込んで文書指導を行った。こうした村方の実務に即した文書作成の経験が、加子母村の百姓たちの文書理解や村政遂行能力の向上に寄与したことは想像するに難くない。

また、村方では自分たちの生活慣行を守るため、御山守から示された案文の文言に疑問を呈し、削除や修正を求めることもあった。御山守も村方の事情を汲み取りながら文言の調整を行い、森林管理と村方の利害の両立を図れるように対処していた。

25) 明和8年「日記」3月12日条。

26) 前掲、明和8年「卯年中御用状留」。

本稿では、文書作成に関わる村方の様子や御山守の介入のあり方について、具体的な事例を抽出・紹介するにとどまっており、いまだ本格的な検討には至っていない。村方における識字能力の向上とその平準化や文書認識の深化に関する分析は、後日を期したいと考えている。

